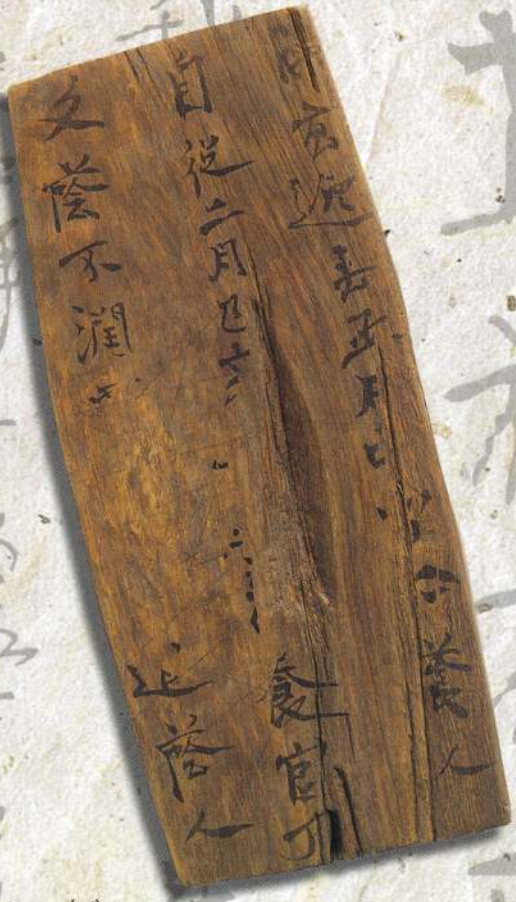
古代地方木簡の世紀

西河原木簡から見えてくるもの



(財)滋賀県文化財保護協会

目次

発刊にあたって

古代地方木簡の世紀―西河原木簡から見えてくるもの―

一、古代地方木簡の世紀　渡辺晃宏　8
―七世紀の木簡と西河原遺跡群出土木簡―

二、西河原遺跡群を掘る　畑中英二　55

三、西河原木簡群の再検討　市大樹　79

四、討論　西河原木簡をめぐって　パネラー／渡辺晃宏　116
市大樹
畑中英二
コーディネーター／大橋信弥

五、近淡海安国造と葦浦屯倉　大橋信弥　141
―西河原木簡群から見えてくるもの―

付編　塩津港遺跡出土の起請文木札について　濱修　177

一、古代地方木簡の世紀

―七世紀の木簡と西河原遺跡群出土木簡―

奈良文化財研究所　渡辺晃宏

奈良文化財研究所の渡辺と申します。日ごろは平城宮や平城京の発掘調査と、木簡をはじめとした出土文字資料の整理・解読にあたっております。

さて、今日のお話は「古代地方木簡の世紀」ということで、今回の展示にちなんだお話をさせていただきます。

今回の展示では、滋賀県内だけではなく、伊場（いば）遺跡や屋代（やしろ）遺跡群といった七世紀を中心とする木簡の実物が都合百点以上も、展示されています。これだけの数の木簡の実物が一堂に会するというのは、おそらくこれまでになかった、たいへん画期的な展示だと思います。これだけの規模の展示を実現されるにあたっての関係者の方々のご苦労は並たいていではなかっただろうと思います。まず、これほどの画期的な展示の実現にご尽力されたみなさまに対し、心から敬意を表したいと思います。また、このなかでこういう講演をさせていただくことはたいへん光栄です。それに応えられるかどうかわかりませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

「地方木簡の世紀」とは

さて、木簡の実物がこれだけたくさん並ぶ展示はおそらく初めてだろうと申しましたが、これは木簡という資料そのものの性格に根ざすところが大です。今回展示されている木簡はすべて科学的な保存処理を施したものですので、乾いた状態で何気なく置いてあるように見えるかも知れません。しかし、発掘現場で出る木簡は、日本の場合はほとんどたっぷり水分がある状態で出土します。充分な水分のある状態で土の中にパックされ、日光（紫外線）と空気（酸素）から遮断される環境が保たれて初めて、木簡は腐らずに残ります。しかも何百年、長いものは千年以上、奈良時代の木簡ですと千三百年近くもの間、ずっと土のなかに入っていたものですから、形はしっかりしているように見えていても、中は高野豆腐のようになっているのだといわれています。水がなくなってしまったら、変形したり字が消えてしまったりすることがあるといいます。水分によって辛うじて形が保たれているたいへん弱い、もろい遺物なのです。ですから、発掘した後も、水に漬けた状態で保存しておかなければいけません。木簡はそんなたいへんデリケートな遺物ですので、なかなか展示には耐えないものが多いのです。

それが科学的な保存処理をした結果、一応安定した状態になって、今回のようにまとまった展

示をすることができるようになった。ただ、保存処理をしても決して絶対に大丈夫というわけではなくて、保存処理後の木簡も温度や湿度の変化にはたいへん敏感ですので、少しでもダメージを少なくするために、長期間の展示は避けた方がよろしい。ですから、今回も限られた時間の展示ということになってしまいました。この機会をぜひ逃さずに、じっくりご覧になっていただけたらと思います。

さて、今回の展示のタイトル「古代地方木簡の世紀」というのは、どこかで聞いたような名前なのですが、実は私は何年か前に『平城京と木簡の世紀』という本を書きました。「木簡の世紀」というのは、七世紀末から八世紀までを指す言葉として、私は用いたわけです。

この「木簡の世紀」は、実はさらに元ネタがありまして、もともとは北山茂夫先生が『万葉の世紀』という有名な論文集をお書きになって、それをもじって「木簡の世紀」というタイトルを付けたわけです。今回は、さらにそれをまた転用されるかたちで「地方木簡の世紀」という名前を付けられたようです。

「地方木簡の世紀」とは何かということをちょっと説明しておく必要があるかと思います。私は、七世紀の末から八世紀までを「木簡の世紀」と呼んだわけですが、そのなかで特に「地方木簡の世紀」というのはいったい何か。私は、地方木簡によって研究が牽引されてきた、特に七世紀の後半ごろを指す時代区分というふうにとりあえずはその意図を理解いたしました。

今回の展示では、七世紀の後半の木簡がたくさん展示をされています。特に今回のメインである西河原遺跡群の木簡、それから静岡県浜松市にある伊場遺跡群の木簡、長野県千曲（ちくま）市にある屋代遺跡群の木簡。これら木簡が研究を牽引してきた時代を「地方木簡の世紀」と呼んでよいだろうと考えています。

ただ、これまでその地方木簡の世紀をそれらの遺跡が牽引してきたといっても、どちらかというと、孤立してそれぞれの木簡が存在していました。ところが、最近の新しい木簡の発見や研究の進展によって、それらが孤立した状態ではなく、有機的にとらえて比較検討ができるようになってきた。地方木簡の世紀にまた新しい光が投げかけられつつある。今回の展示は、ちょうどその機にぴったり合ったものになっているだろうと思います。

さて、前置きはこのくらいにして、七世紀の木簡の研究をリードしてきた遺跡にはどんなものがあるか。いまも少し名前を出しましたが、それを少し最初に紹介しておきます。西河原遺跡群に関しては、このあと畑中さん、市さんの報告で詳しいお話があると思いますので、ここではそれ以外のものをご紹介することにします。

七世紀木簡研究をリードしてきた地方の遺跡

伊場遺跡

まず、地方木簡の研究でわれわれが一番最初に参照しなければいけないのは、静岡県浜松市の

【辛丑年(七〇一)・大宝一】

106 福岡・元岡桑原遺跡群（木研一三）

・「丈太宝元年辛丑十二月廿二日
□□□□□麁廿四連代稅
宮川内□□黒毛馬腕□」
〔持カ〕〔白カ〕

・「丈　六人部□□」　137×27×5　032

【壬寅年(七〇二)・大宝二】

107 滋賀・西河原宮ノ内遺跡（木研一九。企画展図録）

・「壬寅年正月廿五日　三寸造廣山『□□』
勝鹿首大国『□□』。」
〔八十カ〕

・「「　□田二百戸」　□□
「　」　272×44×7　011

【癸卯年(七〇三)・大宝三】

108 奈良・藤原宮跡（木研二七。飛鳥藤原木簡概報一九）

癸卯…月一日記出雲国…奎原□　091

109 奈良・平城宮跡（木研二五。平城木簡概報三七）

「癸卯年太寶三年正月宮内省□四年□□
〔入カ〕
年慶雲三年丁未年慶雲肆年孝服」　(265)×30×4　081
〔考〕

二、西河原遺跡群を掘る

㈶滋賀県文化財保護協会　畑中英二

西河原遺跡群とは

その位置と特徴

滋賀県文化財保護協会の畑中と申します。よろしくお願いします。

私に与えられました演題は「考古学から見た西河原遺跡群」です。主に発掘調査の場で、どのように木簡が出てきたのかというような話をさせてりただいて、次の市さんのお話でどのような木簡だったのかという話につなげたいと思っております。

西河原遺跡群とは、琵琶湖東岸の中央にある野洲（やす）市西河原周辺にある遺跡群を総称したものですので、『遺跡地図』をご覧になってもこういった名前は出てきません。平成十六（二〇〇四）年に合併して現在、野洲市になっておりますが、もとは中主（ちゅうず）町に属していました。

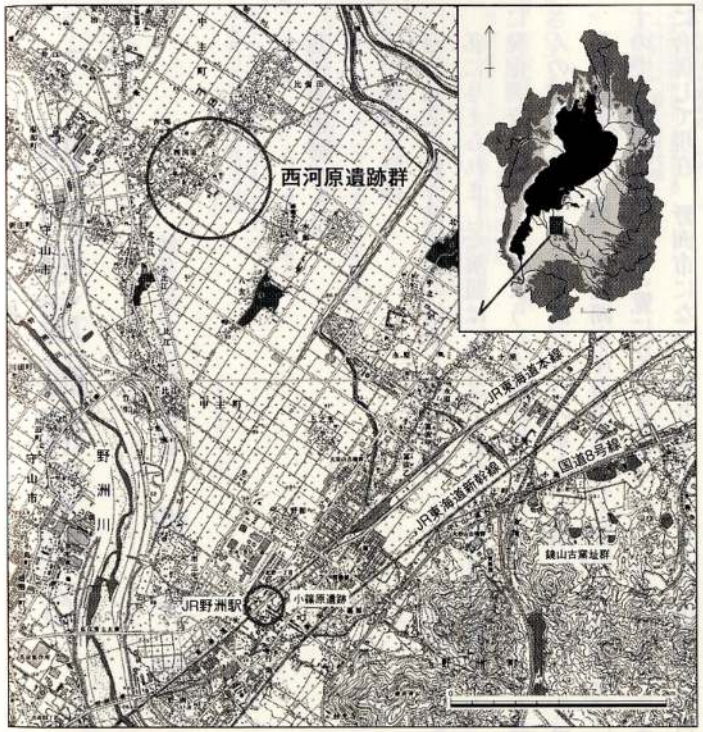


図1　調査位置図

まず、西河原遺跡群の特徴について簡単に述べることにします。

遺跡群の年代は、おおむね七世紀後葉から八世紀前葉を中心とします。前後の時期と比較しますと、この時期に盛期を迎えています。

西河原遺跡群周辺の田んぼの向きは、野洲郡統一条里と言いまして北に対して東に三十三度ほど振っているのですが、この時期に検出される建物や溝などは、おおむね北を指向するという特徴が

あります。

また平城京や藤原京といった都城でよく使われるような畿内系暗文土師器と呼ばれる土器がたくさん出土します。

ほかには、木簡が遺構に伴ってたくさん出ることや、さまざまな物資が集まって散っていくというような場であったことがわかっています。この点については、のちほど詳しく説明させていただきます。

また、西河原遺跡群の立地がおおむね琵琶湖に面している、あるいは生活域の限界が琵琶湖に一番近い生活の場にあったということがわかっています。そのため地下水位が高く、木簡などの有機物が遺りやすい状況になっています。

ＪＲ東海道本線、新幹線、国道といった近世東山道のルート、さかのぼって中世東海道、古代の東山道から五、六キロほど琵琶湖のほうに行ったところに位置しているのです。

二十年来の調査

先ほどの渡辺さんのお話にもありましたように、およそ二十年にもわたる調査によって西河原遺跡群から出てくる木簡は、個々に研究が進められていたものの、遺跡の性格自体は十分に検討されておらず、よくわかりませんでした。

そのなかで、平成十八年度に私が県道建設に伴う西河原宮ノ内遺跡の調査を担当いたしまして、

いずれにしても、古代の陸上交通路に対して、西河原遺跡群はどのような位置関係にあったのかということは、当然まだ議論していく必要があるだろうということになっています。この点につきましては、討論の議題になろうかと思います。

琵琶湖周辺地域においては、少なくとも奈良時代半ば以降の官衙と考えられる遺跡は、図に示すように主要陸路に沿って立地する傾向にありますが、足利説東山道ルートからみると西河原遺跡群に関しては陸路からは少し遠いのです。一方高橋説東山道ルートからみると、比較的近いところにあるということになります。西河原遺跡群が盛期を迎えていた七世紀後葉から八世紀前半までの古代東山道がどこを通っていたのかを明らかにすることは、きわめて重要であると考えられます。西河原森ノ内二号木簡に稲を運ぶにあたって馬を得ることが出来なかったので舟で取りに行けと記されているのをはじめとして、櫂や浮きなどの漁具とともに馬具も出土しています。水路と陸路との結節点であることがわかります。

つまり、奈良時代半ば以降の官衙と考えられる遺跡が主要陸路に沿って立地する傾向があるのに対して、西河原遺跡群は陸路のみならず琵琶湖に面したような立地をとることがもっとも大きな特徴だといえるのです。

東山道ルートを含めて西河原遺跡群と八世紀代の野洲郡家であろうと考えられている小篠原遺跡との関係については、次の市さんからの話を受けて、討論できればと思っております。

ご静聴いただき、ありがとうございました。

三、西河原木簡群の再検討

奈良文化財研究所　市　大　樹

はじめに

奈良文化財研究所の市大樹（ひろき）です。研究所に入って今年で八年目になります。一年間だけ、渡辺晃宏さんとご一緒に平城宮の木簡の整理に携わったのですが、すぐに飛鳥藤原宮跡発掘調査部に異動になり、それからは主に飛鳥や藤原宮・京から出土した木簡の整理をしております。

今回は、野洲市の西河原遺跡群から出土した木簡についてお話しさせていただきます。西河原木簡群の時代は、飛鳥時代に始まり、藤原京の時代を経て、平城京の途中までです。私は仕事の関係上、飛鳥・藤原の木簡を整理する機会が多く、同じ時代の地方木簡であるということで、今回このような形でお話をする機会を与えていただきました。

今回の展覧会に先立って、何回か実物を調査し、木簡の読み直しをおこないました。一点ずつ

文字を確認したところ、だいたい昔発表された釈文どおりでいけますが、ごく一部については、現在の知見をもってすれば、もうちょっと読める部分があることがわかりました。ただし、一文字新たに読めたことによって、世界観が大きく変われば面白いのですが、なかなかそういった事例は少ないようです。今回はうまくいくかどうか……。

木簡の出土遺跡

さて、「西河原木簡群の再検討」という題名をつけましたが、あえて「群」を入れた点にご注意下さい。これは、西河原森ノ内遺跡、西河原宮ノ内遺跡、西河原遺跡、湯ノ部遺跡、光相寺遺跡、虫生遺跡など、さまざまな遺跡から出土した木簡を総称したものです。先ほどの畑中英二さんのご報告にもありましたように、野洲市西河原のエリアには、だいたい一キロメートル四方に収まる範囲に、よく似た傾向を示す遺跡が点在していることから、全体を西河原遺跡群として把握することが可能です。木簡も群として考え直すことによって、何か見えてこないだろうか、という観点から整理をしてみたいと思います。

古代木簡の時代区分

対象になる古代木簡は全部で九十五点あります。その内訳は、①西河原森ノ内遺跡が十八点、②西河原宮ノ内遺跡が六十四点、③西河原遺跡が六点、④湯ノ部遺跡が一点、⑤光相寺遺跡が五点、

⑥虫生遺跡が一点です。②西河原宮ノ内遺跡のうち、五十七点は削屑木簡です。

これらを時期別に整理し直すと、〔1〕七世紀後半が十点、〔2〕七世紀末～八世紀初頭が十九点、〔3〕八世紀前半が六十点（うち五十七点が削屑）、〔4〕九世紀後半が二点、〔5〕時期不詳が四点となります。一部だけ九世紀の木簡もあるのですが、例外的なので今回は置いておきたいと思います。木簡の中心はあくまでも七世紀後半～八世紀前半にあり、特に七世紀末～八世紀初頭のものが多いという印象を受けます。

これらの木簡は各遺跡の報告書などで取り上げられてきました。立命館大学におられた山尾幸久先生は、西河原木簡群を最も詳しく検討された方で、各遺跡の報告書に多くの文章を執筆され、論文もたくさん書かれています。山尾先生の書かれた木簡の報告書・論文では、木簡を個別に取り上げるにとどめず、西河原木簡群全体を視野に入れた幅広い検討がなされています。この報告をおこなうにあたり、最も参考にさせていただきました。

それから、今回の展覧会を企画されました大橋信弥さんも、この西河原木簡群全体に関する見通しを述べた論文を発表されており、大いに参考にさせていただきました。また私も、これらの研究に導かれながら、展覧会の図録『古代地方木簡の世界』に「西河原木簡群の世界」という小文を書かせていただきました。また後ほどにでも、ご参照いただければと思います。

四、討論　西河原木簡をめぐって

パネラー／渡辺晃宏
市大樹
畑中英二
コーディネーター／大橋信弥

○西河原遺跡群は郡家なのか

大橋　西河原遺跡群は湖辺に存在する遺跡であるということが、一番大きな特徴だと思います。地下水位が高いおかげで、木簡がたくさん残ったという幸運があったわけですが、畑中さんのお話にもあったように、部分的な調査ではなかなか全体像がつかめない。そのわりに、木簡は非常にいろんなことを語ってくれるということで、そういう点では想像は非常にかきたてられます。

私も次の講座で、想像を交えた話をさせていただきたいと思います。今日はそういうことではなくて、もう少し今日のお話に即した議論にしていきたいと思います。

今日の皆さんのお話のなかで、いくつかの問題が出てきました。一つはこの遺跡の性格をどう考えるかということです。今日のお話のなかで、かなり絞り込まれたことは確かですね。木簡の内容からこの遺跡は野洲郡家、さらにその前身である安評家ではないかということを市さんもおっしゃっていますし、畑中さんも官衙的な色彩が強いということをおっしゃっています。

まず、畑中さんから、官衙的な部分についてもう少し補足的にお話がありましたらお願いします。

畑中　先ほど、おおむねお話させていただいたのですが、あらためて述べますと、遺構のうえからは、大型の倉庫、溝で区画された建物群、そして木簡の内容から官衙的な遺跡であるといえます。ただし、八世紀以降に顕著にみられるコの字形配置の建物群の有無などについては、判りません。調査区自体が狭いものですから、その点については今後の課題ということになるわけです。

それから、木簡以外の遺物からみますと、藤原京や平城京といった都城に非常に似た様式の土器を使う傾向があるということが、まず大きなところであろうかと思います。考古学的には、基本的にはそういった点が、現状では普通の一般的に見られる遺跡

とは違うという意味で、官衙的であろうと判断しているというところです。

○木簡からは郡家の可能性が非常に高い

大橋　議論のなかで、市さんからも東山道との関わりについてのお話が出ましたが、そういう道路と官衙の関連について何かお考えがありましたら、畑中さん、お願いします。

畑中　77頁の図11「主要道路と官衙遺跡」をご覧いただくと、扇状地の端部を通っていくであろうと考えた足利説のルートがあります。大きめの破線です。このルートに隣接して、一番南の端から近江国庁、矢倉口遺跡、岡遺跡、手原遺跡などがあります。これは野洲川の上流へ向かっていくもので平安時代からの東海道ルートです。

そのまま北上するルートでいきますと、小篠原遺跡や御館前遺跡（近江八幡市）が見られるわけです。琵琶湖周辺地域においては、こういった主要陸路沿いに官衙遺跡が展開するというのは、一般的な理解だというような認識をしています。

ただし、これらの遺跡の年代を見ていくと、七世紀にさかのぼるものは非常に少なく、むしろ八世紀半ば以降、確実に存在するとみられるものが大半であるという傾向があります。

そこで、野洲郡内の西河原遺跡群以外の官衙的な遺跡（野洲郡衙推定地）をみてみると、小篠原遺跡をあげることができます。ただし、小篠原遺跡については、隣接する安城寺遺跡では六世紀末頃から遺構や遺物が見られるのですが、小篠原遺跡で確実に官衙的な遺構と遺物の両者から見

られるようになるのは八世紀に入ってからです。八世紀前半のうちには展開していると考えられるのですが、その中でも八世紀半ばに近い時期だろうと考えられます。ですから、小篠原遺跡に先行する野洲郡家は西河原遺跡群であった可能性が高いと考えます。ただし、そのときの東山道がどこを通っていたかが問題になるのです。

大橋　道路と官衙ですが、西河原遺跡群の性格を考える場合に、道路との関わりを考える必要がありそうですね。西河原遺跡群と道路とのかかわりについては、市さんも強く主張されていますし、畑中さんもそういうお考えだと思います。この点については、あとであらためてお話いただくことにします。

では、渡辺さんには地方出土木簡とその遺跡について、全体的なお話をしていただきましたので、この件についてひとことコメントをいただければと思います。

渡辺　私も木簡の中身だけからいえば、野洲郡家の可能性が非常に高くなったと理解しています。

つまり、市さん、畑中さんの見解に賛成です。郡符木簡が出ていること、それから、西河原森ノ内一号木簡の「馬道郷□□里」の個人を管理しているような、何らかの帳簿の木簡が出ていることなどから考えると、郡家の可能性が高いと結論づけられると思います。

ただ、郡家の、たとえば倉庫が出ているということだけからい

私個人の能力を上げていく必要もあるのですが、考古学の方法論をまだまだ高めていかなければならないところがあるなと感じました。これからもうひとふんばり、もうふたふんばりしていきたいと思っています。

西河原遺跡群を明らかにしていくということについては、これのみにとどまる問題ではありません。琵琶湖を意識した官衙ということで、この地域の持つ個性などもう少しいろいろ考えていければいいなと思っています。みなさんのご支援をこれからもいただければと思います。

大橋　どうもありがとうございました。

西河原遺跡群は、先ほどのお話にもありましたように、これからは発掘調査があまりおこなわれないだろうと考えられています。しかし、木簡をはじめ多くの遺構・遺物はまだ土の中にうずもれている可能性があるわけです。

いままでは開発に対応しつつ発掘調査を行ってきたわけですが、やはり保存をはかるうえでも、これからは学術的な調査が必要になると思います。今回の展示やシンポジウムがそういう気運を高める役割を果たせば、これに勝る幸いはありません。

ご期待に沿えたかどうか心配ですが、長時間にわたりましたが、これにて終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

五、近淡海安国造と葦浦屯倉

―西河原木簡群から見えてくるもの―

滋賀県立安土考古博物館　学芸課長　大橋信弥

はじめに

こんにちは、大橋です。展覧会が今日で終わりということですが、画期的な展示だとお褒めの言葉を頂くいっぽう、ちょっと判りにくいといった声もあり、木簡の展覧会の難しさを感じています。

私が本日お話ししますのは、今回の展覧会と先日開催しました記念シンポジウムを企画するなかで、西河原遺跡群から出た木簡を考えるにあたって、その前史となる時代を話してはどうかという提案があり、こうしたお話をさせていただくことになりました。

「近淡海安国造（ちかつおうみのやすのくにのみやつこ）と葦浦屯倉（あしうらのみやけ）―西河原木簡群から見えてくるもの―」というタイトルがつい

ていますが、私も西河原木簡群をいろいろ調べるなかで、その前身になると思われる葦浦屯倉と、それに深く関わったとみられる安国造について、少し見通しが立ってきたということもありまして、その一端をお話ししたいと思います。

西河原木簡群について

図1にありますように、西河原遺跡群は、古代野洲地域の政治的中心がありました、山手の小篠原地域とは異なり、かなり琵琶湖よりに位置しています。現在と当時では、湖の水位が相当違いますので、アミのかかっている範囲くらいまで湖だったと考えられています。ですから西河原遺跡群のすぐ近くまで湖だったとみられます。

古代の野洲川は、その名が示すように、扇状地をあちらこちらに流れていたことが、旧河道の痕跡から判ります。したがって当時の本流が何処を流れていたかはよく判りませんが、現在の河道が天井川化したのは江戸時代といわれています。私も今から三十年ぐらい前、野洲川改修事業で服部遺跡の調査を担当いたしまして、広い面積を掘りました。

服部遺跡のその当時の調査では、奈良時代の条里方向を取る直線的な溝跡から、五点の木簡がまとまって出土しており、今回の展覧会にも並んでいます。大津市の北大津遺跡出土の音義木簡とともに、滋賀県で最も古い木簡の出土例として記憶に残っています。そして服部遺跡は、西河原遺跡群に最も近い奈良時代の遺跡としても、関連が注目されます。

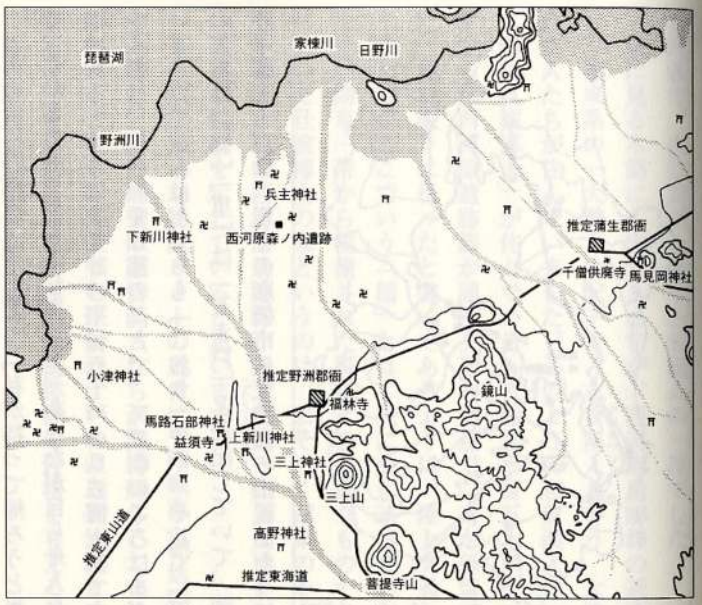


図1　西河原森ノ内遺跡周辺の式内社・古代寺院跡・推定郡衙・推定主要街道

本日の話は、西河原木簡群から見えてくるものということですから、シンポジウムと一部重なりますが、まず著名な木簡を中心に、私なりの理解についてお話したいと思います。

西河原森ノ内二号木簡（口絵3、82頁）

まず、著名な西河原森ノ内二号木簡です。内容の豊富な木簡で、ここから多くのことが考えられると思いますが、短冊形の長い板の両面に比較的大きな文字で書かれた文書の木簡で、第2期と書いていますように七世紀後半のころの古い木簡です。椋直（くらのあたい）という人が、おそらく西河原遺跡群の住民である卜部（うらべ）という人に稲の運漕を命じた手紙です。

㈶滋賀県文化財保護協会　濱　修

滋賀県文化財保護協会の濱と申します。本日は、昨年（平成十九年）の塩津港遺跡発掘調査で出てきました起請文木札について説明させていただきます。

私は発掘の担当ではなく、木簡の整理や文字の解読に携わっています。まだまだ全部整理しきれておらず、これからもっといろんなことがわかってくると思いますが、途中経過ということで報告させていただきます。

起請文とは何か

さて、塩津港遺跡から出てきた起請文木札の意義というのはどういうことかというと、第一に木札に書かれた起請文が日本で初めて見つかったことです。紙に書かれた起請文は東大寺、石山寺、高野山などの社寺にたくさん残され、『平安遺文』や『鎌倉遺文』で読むことができます。

第二には日本で一番古い起請文が書かれているということです。それは五二号木簡と呼んでいますが、ここに保延三年（一一三七）という年号が記されています。紙で残っている起請文で、日本で一番古いものは東大寺に残る久安四年（一一四八）の「三春の是行起請文」（『平安遺文』二六四四号）といわれていますが、それよりも十一年も古い年号が記されています。

第三に、一〇号木簡は長さが二メートル二十センチ五ミリもあり、ジャイアント馬場よりも大きいのです。木簡は全国で三十五万点も出土していますが、日本で一番長い木簡です。つまり、塩津木簡は日本で一番が三つもあるという非常に意義深いものです。

それと書かれている内容も、古代末から中世にかけての時代に、民衆がどういった考え方をしていたのかという思想的な問題や、地方の経済・流通の問題、宗教など、古代・中世社会を考えるうえで非常に重要な内容を持っているものです。

塩津港遺跡の位置と古代の塩津

まず塩津港遺跡の場所ですが、琵琶湖の一番北の端という場所にあります（図1）。近江の国では一番日本海に近いというのが今回のポイントになってくるわけです。

今回の調査地は琵琶湖の湖岸にあり（図2）、大川（塩津川）の川幅を広げようということで、平成十八年から発掘調査をしています。木簡がたくさん出てきましたのは

図1　古代の琵琶湖航路

十九年度、つまり昨年ですが、今年もまだ発掘調査中で、これからまだまだいろんな面白いものが出てくるのではないかなと期待しています。

塩津の地名はいくつかの文献に出てきます。一つが『万葉集』巻三の三六五号に出てくる笠朝臣金村の歌です。

塩津山　打ち越え行けば　我が乗れる
馬ぞつまづく　家恋ふらしも

塩津山を越えて敦賀へ行くということですが、深坂峠という非常に厳しい峠があるということで、馬がつまずいた。これはきっと家の者が私のことを心配しているのだなというようなことを詠った歌です。もう一つは巻九の一七三四号にあります。

図2　調査位置図

高島の　阿渡の水門を　漕ぎ過ぎて　塩津菅浦　今か漕ぐらむ

高島の安曇の港を過ぎて、今は塩津か菅浦付近であろうか、というもの。これは明らかに船に乗っているということがわかります。この時代に琵琶湖の湖上交通はかなり発達しているわけで、京の都を出て大津から船で塩津へ着き、深坂峠を越えて敦賀から北陸へ行くということが、この『万葉集』の二つの歌からもわかります。

『続日本紀』に藤原仲麻呂の乱の経緯が記されています。仲麻呂が乱を起こして、北陸へ逃げないといけないということで船に乗って、高島の勝野の辺りから塩津に向かいますが、非常に波が荒くてどうやら塩津に上陸できず、塩津経由で北陸へ行くのを断念して、もう一度高島へ戻り、上陸した勝野で殺されるという記録が残っています。

もう一つ、『延喜式』には北陸六国、能登、佐渡の税は敦賀に運び、敦賀から塩津に集めて、塩津からまた船で大津に運び、都に運送しなさいとあります。その船賃がこれで決められています。このように古代塩津は北陸と平安京を結ぶ交通経路の重要な拠点であったということがわかります。

もう一つ文学の世界で、『源氏物語』の作者の紫式部もこの道を通っています。長徳二年（九九六）、父の藤原為時が越前の国守に赴任するため紫式部も同行します。

塩津から深坂峠を越えて越前の国へ行くわけなのですが、この峠を越えるときの歌です。